

大平「私が障害を持つて生まれたからお母さんは仕事を辞めた」と娘に思っ**て**ほしくなかった



ね。入園できるかどうか、親の心は不安ではちきれそうなんですから。

子育てが親を育てる

こう、と。(笑)

竹中 弁護士として見ても、こういう人は珍しいでしょう？

大平 そうですね。場合によっては、自ら命を絶とうとしますから……。

私はそれだけはしてくるなど、そのことばかり心配していました。もしもそんなことになっていたら、公判で例の調書が崩れて、完全無罪となることもなかったでしょう。

子どものために、がんばった

竹中 今日は「ユニバーサル(性別、年齢、障害等の違いにかかわりのない)子育て」の話のようですが、なんで無関係な冤罪の話なのかと思われるかもしれません(笑)。いやいや、関係は大ありなんです。昔は「父親の背中を見て子は育つ」と言いましたが、いまは「おかん(母親)の背中を見て子は育つ」時代です。村木さんには26歳と20歳のお嬢さんがいて、突然

降ってわいた冤罪をお母さんがどうやって乗り越えていくのか、その一部始終を見てこられた。無罪が決まった直後の記者会見で村木さんは「娘たちのためにがんばれた」とおっしゃいましたが、あの言葉を私は一生忘れません。ああ、「おかん」としてがんばってこられたのだな、と心の底から共感したわけです。

村木 逮捕された時、ここで私の気持ちが折れたらどうなるかと考えました。将来、娘たちにも何かの形で不幸が襲うかもしれない。そういう時、「お母さんもがんばれなかった」と思い出すしかなかったら、彼女たちも気持ちが萎えてしまう。ここはあきらめずに闘わなければいけないという、いわば「つつかえ棒」ができてすごく楽になりました。

大平 子どもは親の生き方を見ながら育ちますからね。冤罪で逮捕されたことは理不尽で悔しい経験ですが、

その対応において村木さんは、お嬢さんたちにもぎと「生きる指針」を示された。お嬢さんたちだけでなく、女性全体へのすばらしい贈り物になったと思います。

竹中 大平さんは娘の悠ちゃん(5歳)を保育園に通わせているわけですが、いい保育園のようですね。

大平 ええ、娘は毎日楽しそうです。大阪から兵庫県に引っ越したのは彼女が1歳と11カ月の時でした。大阪で待機児童の多さを見聞きしていたので、すんなり入れないので覚悟していました。それに娘はダウン症という障害を持っていますから、「ひよつとしたら受け入れていただけないかも」とも。ところが断られるどころか、園長先生が「入園を1カ月待つてください」と。その間に加配保育士(障害のある子どもに手厚く対応する)を段取りしてくださると聞いて、本当にうれしかったです

竹中 怖いものなしのような大平さんでも、胸が張り裂けるような思いをしてきたと。そんな親たちが安心して子育てできるようにと、村木さんは国の政策のところでがんばっておられるわけですが、ご自身が霞が関のなかで働きながら子育てをしてきた母でもあります。大変だったのではないですか？

村木 一番つらかったのは残業の多さですね。夜中1時、2時まで働くのは当たり前なところですから。保育所と保育ママさんの二重保育にして、眠っている子どもを抱えて夜中にタクシーで家に帰るという生活。

竹中 官僚の仕事をする気はなかった？

村木 辞めたら戻れない職場だった(年齢制限があるためもう1回受け直すことはできない)ので、やれるところまでがんばろうと思ったんです。

ただ、子どもに病気があって夜中に発作が出るので、私はそれまでに帰らなくてはならない。部下は全員が独身男性で心おきなく働いているなかで、いつも自分が先に帰らなくては

村木「下の子が生まれてから部下に優しくなりました
それぞれのいいところを大事にしないといけない

